上越市立教育センター
254号
所報
令和７年11月５(水)発行
発行：上越市大字下門前1770番地
上越市立教育センター
所長　熊木　徹
E-mail　jecenter@jorne.or.jp
URL http://www.jecenter.jorne.ed.jp

職員研修を学校力や授業力、職能の向上に生かしませんか！

～ ８月までの職員研修参加状況と来年度の方向性 ～

４月～８月に開催した市教育センター主催の職員研修への参加状況を集計し分析しました。

＜希望研修1回当たりの参加校数(割合)＞

小 学 校	中 学 校
7.1校（16.1%）	2.5校（12.4%）

＜希望研修の延べ参加者数(割合)＞

小 学 校	中 学 校
208人(29.7%)	58人(15.7%)

※悉皆研修やカウンセリング研修、小学校・中学校のみの研修は除く。

※参加者数の割合は、再任用及び非常勤、市職員、休職者を除く常勤職員数で計算

表（割合）を見ると、小学校の方が参加校数、参加者数とも多いことが分かります。
その他にも次のような傾向が見られました。

① 悉皆を除く希望研修に、職員の30%以上が参加している学校が、小学校18校（市内全小学校の40%）、中学校７校（35%）ある反面、１回も参加していない小学校が６校（13%）、中学校が３校（15%）あるなど、参加状況に学校間格差が見られる。
② 希望研修に２回以上参加している職員が、小学校10人、中学校１人いる。特に小学校は若手職員が積極的に研修に参加しており、校長自ら複数回参加している学校もある。
③ 中学校では、小規模校の職員が積極的に希望研修に参加している。

希望研修に職員一人平均約1.7回参加している二つの学校の校長先生にお話をうかがいました。

【A小学校】
・研修案内を年度始めの４月にだけ回覧するのではなく、担当が各期の申込締切２～３週間前にもう一度全職員に研修案内を回覧している。
・「子どもが主体的に学ぶ授業づくり」に向け、職員自ら関連した内容の研修に参加している。市の要請訪問では、その観点からセンターの研修も紹介してもらっている。

【B小学校】
・研修案内が届くと、校長が「ぜひ参加し勉強してきて」と付箋をはり該当者に渡している。
・年度末の面談を経て、新年度から若手職員の一人に新たな校務分掌を任せることにした。彼はやる気をもって、いろいろな研修会に進んで参加している。

二つの学校とも校長先生のリーダーシップの下、センターの職員研修を効果的に活用して学校力や授業力の向上を目指すと共に、職員一人一人の職能向上も図っていることがうかがえます。

さて、教育委員会では令和８年度の職員研修のあり方について、現在検討を進めています。現場のニーズに合う研修内容の精選をはじめ、職員の皆様が「ぜひ参加したい」と思える魅力的な研修を企画し、上越市の喫緊の課題である学力向上と学級経営（落ち着いた学級づくり、配慮を要する子どもへの対応）に関する研修の充実を図っていきたいと考えています。働き方改革が着実に進んでいますが、「研修は教職員の義務である」ことを今一度肝に銘じたいものです。

（担当　教育センター　指導主事　長谷川）

平井（学校教育課）　①福嶋澄子教諭（大手町小）　②今寺皇祐教諭（稲田小）　③佐藤由美子教諭（国府小）　④西川祥雄教諭（春日新田小）　鹿毛雅治教授（慶応義塾大学）

子どもも教師も 主体的に学ぶ　～8.1 真夏の研修会 in オーレンプラザ～

今年も８月１日に慶應義塾大学の鹿毛雅治先生を講師にお招きし、「鹿毛先生と語る子どもが主体的に学ぶ授業づくりと教師が主体的に学ぶ校内研究づくり研修」を行いました。

子どもが主体的に学ぶためには、教師が主体的に学ぶことが重要です。そのため、昨年同様「授業づくり」と「校内研究づくり」を一体的に取り扱い、いつもと少し違う研修となるように具体例や方法論をできるだけ多くの先生と共有する**対話的な研修会**を企画しました。

当日は**教諭・管理職など77名の先生方**が集まりました。

◆ 子どもが主体的に学ぶ授業づくり（福嶋教諭と今寺教諭の大切にしていること）

福嶋：子どもの「～したい」を大切にし、じわじわ継続して材に近づいていくこと
今寺：子どもが興味をもてるように、材と最初に触れ合う導入を工夫すること

お二人とも子どもの思いを大切にしながら、材（学ぶ対象）との関わりについて工夫をされていました。主体的に学ぶ授業づくりについて「（子どもたちが）ワクワクしそうだな」と想像すること、そのために教師もワクワクして授業づくりに励むこと、「どうやって教えたら、おもしろくなるかな？」と考えるが大切だと学びました。

◆ 教師が主体的に学ぶ校内研究づくり（佐藤教諭と西川教諭の実践）

佐藤：先生方の思いを大切にして、日々研修ができるような主題を設定する。
西川：リアルタイムに公開授業の様子を発信しながら、授業の良い部分、うまくいかなかった部分を職員みんなで共有し、子どもを観る目を養う。

校内研究を推進されているお二人とも、職員の思いを大切にしながら、校内研究が互いに学ぶ合う場となるよう取組を進めておられました。子どもから学び、授業を振り返りながら、「より良い授業」を探求した校内研究を学校全体で行っていくことが理想的だと感じました。

◆ 参加者が感じたこと（研修後アンケートより）

○「指導案は自己表現、プロの教師なのだからそこにオリジナリティを出す」という鹿毛先生のお話に胸が熱くなり、「授業研究こそ教師しかできない仕事」という言葉に明日からの意欲が高まりました。
○教育をするプロとして教師がすること、やるべきことを整理して考えることができました。授業の当事者に教師集団があるということを忘れないでいたいと思いました。

より良い授業に向け、私たち教師が互いに学び合い、互いに高め合う集団になることが何よりも大切だと改めて感じました。子どもが主体的に学ぶ授業づくりに向けて私たち教師もワクワクしながら、授業を構想していきたいものです。　（担当　学校教育課　指導主事　萱森）

赤坂先生と学ぶ！

主体的に学ぶ子どもを育む学級づくり研修

８月５日に上越教育大学の赤坂真二先生を講師にお招きし、学級づくり研修会を行いました。講義を聞くだけでなく、参加者がペアになって対話しながら進める大変充実した研修でした。

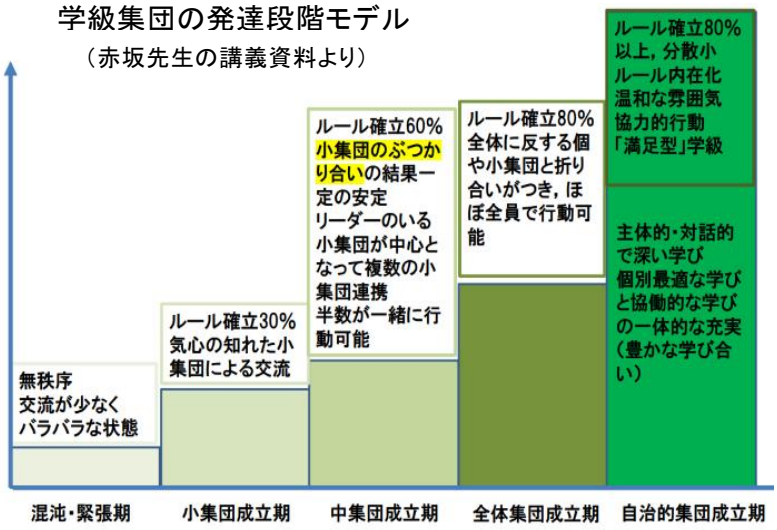
２学期は学校行事もあり、そもそも長い、子どもも教師も疲れてくる、そんな時期ではないでしょうか。教師の疲労度が高くなると、問題解決能力も低下してしまいます。危険なのは起きた問題に対し、理性ではなく感情で対応してしまうことだそうです。起きないに越したことはありませんが、問題がまったく起きない学級はほぼありません。**「学級の危機、その時教師は何を考え何をするか」**という赤坂先生のお話から、よりよい学級づくりのためにすべき教師のはたらきかけなどについて学んだことを紹介します。

◆ 学級機能を高めるために

右図のような段階を踏みながら学級としての機能を高めていくと、トラブルが起きたとしても回復が早いそうです。

そのための３つの見直しと具体的なはたらきかけは次のとおりです。

学級集団の発達段階モデル
（赤坂先生の講義資料より）



① 教師の指導方略の見直し

・授業の中で子どもの理解度に応じた問題を考える。
・授業の様子に応じた適切な評価を行う。
・勉強が得意な子どもに対しても適切な課題を用意する。

② 子どもへの支援の見直し

・子どもに教科の学習に対する意義を示す。
・子どもが物事を批判的に考えることもできるよう支援する。
・子どもの学習状況を正しく把握する。

③ 子どもを受容する指導への見直し

・子どもの話を真剣に聞き、頑張っていることを大いに認める。
・子どもの相談に対し気持ちよく対応する。
・子どもがすることに対し正直に意見を言う。
・先生が間違えた、分からない時、「間違えた」「分からない」と言う。

◆ 子どものやる気を引き出す教師のはたらきかけ

〇一方的に押し付けるのではなく子どもの目線に立ち**対等な関係**として指示を出すようにする。
〇子どもの**温かい行動を見つけ**、意図的にみんなに紹介する。
〇失敗しても努力を認め子どもの気持ちを理解する**共感的な姿勢**で子どもと接する。

「先生は私の話を聞いてくれる」「困ったときに助けてくれる」子どもにそう思ってもらえることは、信頼関係を築く上でとても大切なのだと改めて感じました。

（担当　学校教育課　指導主事　平井）

令和7年度夏期カウンセリング研修会

～　講座の様子や参加者の感想を紹介します　～

「通常の学級における特別支援教育」 ～発達が気になる子への指導と支援の事例から～

上越教育大学　関原真紀　准教授

★児童が気持ちと現実のギャップにもがいていることが印象に残った。問題行動が多いとなまけていると見えがちだが、本当の気持ちに寄り添って声を掛けることが大切だと分かった。

★2学期に取り組んでみたいことや、関わる際に気を付けたいことなど今後のヒントをたくさんもらえた。

「誰一人取り残されないウェルビーイングの向上を目指した学級づくり」

國學院大学　杉田 洋 教授

★自分の中の固定観念や思い込みに目を向けることができた。

★自分も友達も大切にするために互いの思いを分かり合うことができるまで話し合う姿に心が温まり、涙がこみ上げた。集団生活に必要な配慮や思いやりのあるかかわりを日々の授業や生活の中で積み上げていくことが大切だと改めて感じた。

「今、学校に求められるいじめ防止対策の方向性と課題」

関西外国語大学　新井 肇 教授

★些細な事象やちょっとした異変にいかに気付くか、どう児童生徒が援助要求しやすい環境を作っていくのかを考えさせられた。

★日頃の取組の意味づけをしていただいた。いじめの定義等、法に基づいた認識をさらに全職員で深める時間を設けたい。

「多職種連携と BPS に基づくケース・アセスメント&ケース会議の進め方」

柏崎市子ども未来部子どもの発達支援課　小林 東 課長

★事前に BPS ケースシート※を作成してケース会議に臨むことで主体的に課題を選び取ることや支援方策を見つける鍵になりそうだ。

※「生物・心理・社会(Bio-Psycho-Social)」の視点から個人の課題や支援ニーズを多面的に整理・記録するためのアセスメントツール

★生物的、心理的、社会的要因の相互作用を元にしたケースシートを子どもと保護者と一緒に行う「応援会議」にも使ってみたい。